

## 森 鷗 外 論 考

### ——「古い手帳から」への道程——

「古い手帳から」という奇妙な題を付せられた鷗外の作物は、大正十年十一月一日発行の雑誌「明星」第一巻第一号に「其一」が発表され、以後大正十一年七月一日発行の「明星」第二巻第二号の「其九」に至るまで、都合九回にわたって「明星」に発表された。連続して掲載された「古い手帳から」は、すべて「明星」の巻首に収められており、署名も鷗外のイニシアル「M.R.」で統一されている。「其一」の小見出しが「Platon」、「其二」が「Aristoteles」、大正十一年一月一日発行の第一巻第三号の「其三」が「Socrates」と「Epikuros」、「其四」が「希臘及羅馬時代」で、末尾には、「正誤」として、「前冊の388の五行「此派の」は「此派は」の誤植、又同人作奈良五十首の「剪刀」は缺である。傍訓は衍文。」と記されている。前半は、前号の「Socrates」についての一文、すなわち、「しかし精神的貴族（Seneca）を唯一の貴族なりとし、人間の多数を只形のみ獣に異なりとする（Kleanthes）が如き此派の民政主義に向つては進まなかつた。」の誤植を改めたもの、また、「同人作奈良五十首」云々は、同じく前号に、「M.R.」の署名で発表された「奈良五十首」の中の第九首「敕封の筈の皮切りほどく剪刀の音の寒きあかつき」の「剪刀」を「鋏」に改めたものである。前年十月三十一日の夕刻東京駅を発ち、翌十一月一日京都を経て奈良に着いた鷗外森太郎は、翌二日正倉院の曝涼に立ち会っている。帝室博物館総長としての公務であり、「委蛇録」二日の条には、「晴。開正倉扉<sup>(1)</sup>」とあり、「敕封の」なる一首はこの日の囑目の詠である。因みに「奈良五十首」は、巻頭の「京はわが先づ

篠 原 義 彦

教育学部国語教室

車よりおり立ちて古本あさり日をくらす街」から最末尾の「現実の車たちまち我を率て夢の都をはためき出でぬ」に至るまで大旨古都の寧日に遊ぶ楽しさを詠んだ作品が多いが、一方「夢の都」にありながらも「現実」への関心を示す詠作も見られる。第四十三首の「旅にして聞けばいたまし大臣原獣にあらぬ人に衝かると」は、内閣総理大臣原敬の凶変を詠んだものである。原敬が中岡良一の刃のために東京駅で刺殺されたのは十一月四日午後七時二十分のこと、五日付の読売新聞には、「原首相東京駅頭に於て一青年の為に刺殺さる」の見出しが見られる。また、六日の在京各紙は、あらかじめ用意されていた「遺言状」の概要を報じているが、「死後位階勲等の陞叙、授爵等の難有き思召あるとも絶対に辞退申上ぐる事」、「葬儀は郷里盛岡に於て執行し、儀仗兵を附せらるゝ等のことあるも之を辞し、香花の寄贈も辞すべし」、「墓標には位階勲等を記さず単に「原敬の墓」と銘記する事<sup>(2)</sup>」の条は、「奈良官舎」での鷗外森太郎の目にも触れたことであろう。鷗外が生涯三番目の遺言を筆録させるのは、原敬の死から八か月後のことである。

「夢の都」での「現実」の詠は、ただに「旅にして聞けばいたまし大臣原獣にあらぬ人に衝かると」のみにとどまらない。「三毒におぼるる民等法の手を国をゆだねし王を笑ふや」「ひたすらに普通選挙の両刃をや奇しき剣とたふとびけらし」「暁らじな汝が偶像の平等にさざげむ牲は自由なりとは」「富むといひ貧しといふも三毒の上に立てたるけぢめならずや」「貪欲のさけびはここに帝王のあまた眠れる土をとよます」

等の歌が見られる。「三毒に」が十九首目、そして、「ひたすらに」以下の四首は末尾近くの四十五首目から四十八首までに位置している。鷗外が「現実の事」の人となつて、「夢の都」を後にしたのは十一月二十一日の雨の夕暮れ、東京に着いたのは、翌二十二日朝のこと、この日の日録には「晴。朝入東京。参省復命。」とある。

「古い手帳から」の「其五」の見出しは、「Essai」、「其六」が「猶太希臘の古田制」、「其七」が「基督」と「使徒及師父」の二つで、「正誤」として「前号二面十三行民族は民政、三面五行 Kleisthenes の名に文字の顛倒があった。」と記されている。前者は「(594 a. Chr.) Athen は是より民族の初中後期に入つた。」の訂正、また、後者は「Kleisthenes」のスペルの修正である。続く「其八」は、「Karpokrates」について、そして、大正十一年七月一日発行の「明星」に発表された「其九」には、「Augustinus」や「Karl der Grosse」の見出しがあり、「正誤」として「前号第一面末行括弧内 Clemens Alexandrinus」なる記事が見られる。

鷗外の作物「古い手帳から」は、未完のままに終つた。「委蛇録」六月十五日の条には「始不登衙」なる記事が見られ、「自強不息」の人鷗外も死に至る病の前になす術はなかった。在家「第十五日」と記した二十九日には「額田晋診予」と記されており、三十日以後は吉田増蔵の手によつて「委蛇録」は記されることになる。

野田宇太郎が「外観は大らかで沈静に仰ぎみられるが、その内部にはつねにユマニズムの熱火をたぎらせてゐる活火山<sup>(3)</sup>」の姿を見た鷗外、森林太郎の第三の遺言が書かれたのは、「古い手帳から」の「其九」が「明星」に発表されてから五日後の七月六日のことであつた。

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリコ、ニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官憲威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレド

モ生死ノ別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可カラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ榮典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ手続ハソレゾアレベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス<sup>(4)</sup>末尾に日付を記したうえで、「森林太郎言 賀古鶴所書」と明示された第三の遺言が書かれてから三日後の大正十一年七月九日鷗外森林太郎は六十年余の生の終焉を迎えた。

鷗外の最後の遺言については、大正元年九月十三日夜夫人静子とともに殉死して果てた乃木大将希典の残した遺言における峻拒の図式との関連性について留意すべきである<sup>(5)</sup>が、鷗外の死のわずか八か月前に凶刃の犠牲となつた原敬の遺書との近似性についても検討すべきではなからうか。既に触れたように正倉院曝涼のために西下した鷗外は原敬の死を「奈良五十首」の中で詠んでいた。また、大正九年一月五日付の賀古鶴所あて書簡では、

御書状拝見イタシ候 要スルニ世間ハマダノンキナルガ如ク被存候多  
少血ヲ流ス位ノ事ガアツテ始テマジメニナルカト被存候 先ヅ諸方面  
ノ実況、当事者(政府側、資本家側、労働者側)ノ意向機会アル毎ニ  
御タツネ被下度候 原首相ノ訓示的發表ヲ見ルニ

政府  
資本家  
労働者  
ノ協調

ニテ解決スルト云フ一資本家ハ工場閉鎖ラシテハナラズ労働者ハ同盟罷工ラシテハナラヌ各之ヲセズニ遣ルノガ義務ダト云フ一先ヅ以上ノ外無之ヤウニ候ドチラモ義務ニ服シテ権利ヲ主張セズニ居レバ天下泰平ナルベク候シカシ同盟罷工ハ大事ニテ革命ノ端緒タルオソレアリ之ニ反シテ工場閉鎖ハ小事ニテ工場デ一番旨イ汁ヲ吸ヒ居ル資本家ガ之ヲ閉鎖シテ労働者ヲヘコマスルハ不可能ニ可有之候アレドハ無意味

ナル声言ニテ解決ニハナラズト被存候 労働時間問題ハ一同マジメニ  
働クニナルト十時間ヨリ八時間ノ効果ノ方ガ大ナル心理學上実験  
ニテ証セラレ居ルラシク候ナマケルノガ常ニナツテ居ル現状ユエ勉強  
家ハ十時間モ十二時間モ平氣デ働キ居ルト被存候コレモマダー同目  
ガサメヌノデ済ンデ居ルニハアラズヤトモ被存候 安伴君ニ持ツテ行  
クマデニハマダダ〱鍊ラネバナラヌト相考候<sup>(6)</sup>

と記して首相原敬の「訓示的発表」を端緒にして労働問題に並々ならぬ  
関心を示している。とすると、既に示した「奈良五十首」の中の「現実」  
への関心を詠んだ「ひたすらに普通選挙の両刃をや奇しき剣とたふとび  
けらし」「暁らじな汝が偶像の平等にささげむ性は自由なりとは」「富む  
といひ貧しといふも三毒の上に立てたるけぢめならずや」などの歌も偶  
感の作ではなく、むしろ鷗外のかねてからの関心のなせるところといふ  
ことになる。

原敬の死に際して十一月六日付の各紙が報じた遺書の要点について  
は、各紙の間に重大な齟齬はない。かつて乃木に死に際して、大正元年  
九月十七日付の在京各紙が報じたような遺書全文の報道ではなく、内閣  
書記官長高橋光威の談話記事であり、従って各紙の間に多少の文言・言  
辞のちがいはある。例えば、東京朝日の「墓標には位階勲等を記さず単  
に『原敬の墓』と銘記する事」は、東京日日新聞第九面の「覚悟の遺言  
状」なる見出しの記事の中では「墓碑には氏名のみ記し位階勲等を記す  
に及ばず」と記されており、位階勲等と氏名に係る記述が逆になっている  
が、死後の位階勲等の陞叙の辞退と墓標には氏名のみ銘記することと  
いう骨子は各紙とも異同はない。

鷗外森林太郎が残した第三の遺言は、口述筆記という形で行われてい  
る。従って、森林太郎と筆録者賀古鶴所との関係及び遺言筆録者として  
の賀古の適格性の認知から始まっている。そして、死についての森林太  
郎の定義と提示に続いて、「石見人森林太郎」として死にたいという願

望と死後の栄典の拒絶と「森林太郎墓」以外の字を墓標に記すことを拒  
絶する口述者の意志が記されている。原敬の遺書の中には、十一月六日  
付の報道を見るかぎり「死」についての本人の定義や提示は示されてい  
ない。しかし、位階勲等の陞叙の辞退や墓標への注文という点では奇妙  
に一致している。すなわち、「死後位階勲等の陞叙、授爵等の難有き思  
召しあるとも絶対に御辞退申上ぐる事」と「宮内省陸軍皆緑故アレドモ  
生死ノ別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス」、及び「墓標には位階  
勲等を記さず単に『原敬の墓』と銘記する事」と「墓ハ森林太郎墓ノ外  
一字モホル可ラス」との間に本質的な逕庭はない。ともに幕末に生を受  
け明治・大正を生きた人間に共通する一つの型なのか、それとも死の床  
にある鷗外森林太郎の思念の中を八か月前東京駅頭での凶変にたおれた  
原敬の姿が過ったのか、にわかに断定はなしえないもののその近似性は  
見のがしえない。

鷗外の遺言が筆録されたのが大正十一年七月六日、その三日後の七月  
九日鷗外森林太郎は六十年余の生を閉じた。「古い手帳から」の「其十」  
が雑誌「明星」の八月号に載せられることはなかった。「古い手帳から」  
は鷗外の死のために中絶のままに終った作物であり、「明星」八月号は  
巻頭に前号に掲載された「其九」の「Augustus」の冒頭部の原稿影印  
と大正十一年五月二十六日付賀古鶴所あて書簡の全文を「森林太郎先生  
書牘（其一）」として載せるとともに、与謝野寛は、「一隅の卓」の中で  
次のように記している。

森先生を故人として思はねばならぬことになったのは、御家族も、  
御近親も、友人達も、教を受けた私達も全く意外でした。先生が俄に  
御重体だと云ふことを聞いたのは、七月七日の午前で、万里君と私と  
が駆けつけてお宅へ行つてみると、御近親にも今朝になつて初めて通  
知されたと云ふ有様でした。私達は先生が六月十五日から役所を休ん  
で引籠つておいでになることさへ知らなかつたのです。本号の「明星」

の初に載せた書牘にもあるやうに、先生御自身には死期の遠くないこと、この一兩年に迫つてゐることを予想されて居たのでせうが、昔から健康で、病人らしい待遇を受けることの嫌ひであつた先生は、六日の夜半に急に意識が不明になるまでは、親友である賀古博士以外の誰にも知らずと御夫人に対して云はれたので、先生の御病氣は何人に対しても突然の感を与へたのでした。従つて、賀古博士や小金井博士が主治医額田晋博士の診断に由り既に絶望であると云はれるに関らず、どうしても私達はまだ先生が死なれるとは思はなかつたのです。

万里君も私も、先生はまだまだ病に打ち克つ根強い運命を持つておいでになつて、この昏睡が数日持続した上で回復に向ひになるに違ひないと思はずにあらなかつたのです。元氣のよい咳をなさるのも皆が大に頼みにする一つの手掛りでした。八日の午後、昏睡のなかに、平生通りのお声で「昼よりは大分いい」と云はれたのに驚いて、御夫人も私達もどんなに喜んだか知れません。けれども、それが先生の最後のお言葉でした。その前日の夕刻から全く食物の摂取が不可能になつたので、心臓は好調であるに關らず、衰弱のために愈々誰も絶望を思ふに至りました。さうして九日の午前四時頃から著しく呼吸が浅くなり、次第に安らかに息をお引取になつたのは午前七時でした。

私は先生に就て何かと書きたい事も多いやうですが、余り急に永いお別れとなつたので、先生を思ふと涙ばかりこぼれて、じつと落着いて書く氣になれないから、何れ次号に書きます。幸ひ此号には、先輩や友人達が短時日の間に森先生に就て「明星」へ書いて下さつた御厚意を茲に感謝します。お蔭で、かうして先生の記念号を作ることが出来ました。猶八月の「三田文学」、「心の花」、「新小説」等、先生に關係の深かつた諸雑誌が立派な追悼号を出すことになつて居ますから、先生を追憶する人達は是非併せて読まれることを望みます。

「明星」は次号以下にも続いて諸家の森先生追憶談を載せます。ㄟ

ㄱの署名で創刊号から先生のお書きになつた「古い手帳から」が永久に中絶したのは遺憾です。先生は之に由つて、プラトンから現代のマルクス以後の思想までを批評される予定であつたのです。先生を中心として我々同人の復興した「明星」が急に先生を失つたのは、代へるものの無い一大打撃です。先生はこの「古い手帳から」を手始に、いろいろと批評や創作や選集の御計画もあつたのでした。言つても甲斐のない事ながら遺憾至極です(ㄱ)。(傍線筆者)

与謝野寛の証言によれば、「古い手帳から」は、「プラトン」に始まつて、「現代のマルクス以後の思想」に至る批評として掲載される手筈であつたが「其九」で中絶したということになる。また、寛の記すところでは、「古い手帳から」を「手始」として、鵬外には、「いろいろと批評や創作や選集や」の計画もあり、老いてなお意氣盛んな鵬外の相貌を見る思いさえする。このような鵬外の心意氣は、「森林太郎先生書牘(其一)」と銘打つて、「明星」八月号に載せられた大正十一年五月二十六日付賀古鶴所あて書簡や六月十九日付の「兎二角頑強ナル小生ニ対スル非常ナル御煩勞是ハ言詞の能ク尽ス所ニアラズ候」によつて裏打ちされるところでもあるが、果して、「古い手帳から」の内実はどうであらうか。

大正十年十一月一日発行の復刊「明星」第一号には、復刊に至る経緯と今後の抱負が掲載されているが、その中に「明星」発行所では毎月一回同人の編輯会を開きます。十月の編輯会には森先生、永井荷風、石井柏亭、高村光太郎、平野万里、茅野蕭々、長島豊太郎、竹友藻風、与謝野寛、与謝野晶子の諸人が集りました。」という晶子の手になる一文が見られる。この「明星」復刊第一号に係る編輯会については「委蛇録」十月二日の条に見られるところでもあり(ㄱ)、かつての「昂」や「三田文学」の創刊に加勢した鵬外森林太郎の「復活」でもあらう。

鷗外は大正三年一月一日発行の「三田文学」第五巻第一号に「大塩平八郎」を発表した。いわゆる「大塩平八郎（附録）」である。この中で鷗外は同じ一月一日発行の「中央公論」第二十九年第一号に掲載した歴史小説「大塩平八郎」を執筆するに至った経緯と背景に触れたうえで、天保八年二月の平八郎の挙を次のように断じている。

平八郎は天保七年に米価の騰貴した最中に陰謀を企てて、八年二月に事を挙げた。貧民の身方になって、官吏と富豪に反抗したのである。さうして見れば、此事件は社会問題と関係してゐる。勿論社会問題と云ふ名は、西洋の十八世紀末に、工業に機関を使用するやうになり、大工場が起つてから、企業者と労働者との間に生じたものではあるが、<sup>(4)</sup>其萌芽はこの国にも昔からある。貧富の差から生ずる衝突は皆それである。

若し平八郎が、人に貴賤貧富の別のあるのは自然の結果だから、成行の儘に放任するが好いと、個人主義的に考へたら、暴動は起さなかつたらう。

<sup>(5)</sup>若し平八郎が、国家なり、自治団体なりにたよつて当時の秩序を維持してゐながら、救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。<sup>(6)</sup>幕府のために謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手へ帰せぬ前から、自治団体として幾分の発展を遂げてゐた大阪に、平八郎の手腕を揮はせる余地があつたら、暴動は起らなかつたらう。

<sup>(7)</sup>この二つの道が塞がつてゐたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望を達せようとした。平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である<sup>(8)</sup>。(傍線・傍点筆者)

鷗外は天保年間の出来事の中に近代資本主義社会の「企業者」と「労働者」の關係を見ようとするのであろうか。

「古い手帳から」は与謝野寛が「一隅の卓」で記したように「永久に

中絶した」作物であり、その全貌は知る由もない。しかし、「古い手帳から」の「其一」が「Platon」に始まり、「其九」の「Augustinus」と「Karl der Grosse」で中絶していることから考えて、鷗外はその生の終焉において、いわゆる社会問題の「萌芽」(傍線(イ)部)を泰西の過去の中に求めたのであろう。そして、寛の記述のとおり、「現代のマルクス以後の思想」までを鳥瞰すべく起筆したが、その想いは七月九日の死によって灰燼に帰してしまつた。

引用文の中において、鷗外は「若し」という仮定の辞を二度用いている。一つは、「若し」平八郎が「個人主義的」に考へていたら天保年間の暴動は起らなかつたであらうというくだりであり、他の一つは、「若し」平八郎が「当時の秩序」を維持しつつ、一方で貧しい民の「救済の方法」を考へることができたなら「暴動」は起らなかつたであらうという指摘である。後者は、傍線部(ロ)の箇所であり、傍線部(イ)をより具体的に記述したのが(ハ)の箇所ということになる。そして、(ハ)の中に「平八郎風情」という微妙な表現が用いられている。「平八郎風情」とは蔑視の言辞であり、傍線部(ニ)における大塩平八郎に対する鷗外の最終の断案である「平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である」の「未だ」と相呼応する鷗外的情感の洩れ出た言辞である。歴史小説「大塩平八郎」と「大塩平八郎（附録）」に遅れること一か月の大正三年二月一日発行の「新小説」第十九年第二巻に発表された歴史小説「堺事件」においても鷗外は極めて印象的な表現を用いて、土佐藩兵箕浦猪之吉の生に断案を下していた。元六番歩兵隊長箕浦猪之吉は、源姓、名は元章、仙山と号してゐる。土佐国土佐郡潮江村に住んで五人扶持、十五石を受ける扨従格の家に、弘化元年十一月十一日に生れた。当年二十五歳である。祖父を忠平、父を万次郎と云ふ。母は依田氏、名は梅である。安政四年に江戸に遊学し、万延元年には江戸で容堂侯の侍読になり、同じ年に帰国して文館の助教に任ぜられた。次いで容堂侯の扨従を勤めて、七八年経過し、

馬廻格に進んだ。それが藩の歩兵小隊司令を命ぜられたのは、慶応三年十一月で、僅か三箇月勤めてゐるうちに、堺の事件が起つた。さう云ふ履歴の人だから箕浦は詩歌の嗜もあり、書は草書を立派に書いた。文房具を前に置かれた時、箕浦は、「甚だ見苦しうはございまするが」と挨拶して、腹栗の七絶を書いた。

除却妖氛答国恩 決然豈可省人言 唯教大義伝千載 一死元来不足論

攘夷はまだ此男の本領であつたのである<sup>(10)</sup> (傍点筆者)。

鷗外の手を離れた矢は鋭くかつ正鵠を得ている。「まだ」「此男」ともに箕浦の前近代性への筆者のアイロニーを存分に含んだ語である。「未だ」と「まだ」、「平八郎風情」と「此男」、使う言辭は異なるにしても、みごとに作者の深部を語り得ている。そして、歴史小説「堺事件」は「十一月十七日に、目附方は橋詰以下九人のものに御用召を發した。生き残つた八人は、川谷の墓に別を告げて入田村を出立し、二十七日に高知に着いた。即時に目附役場に出ると、各通の書面を以て、『御即位御祝式に被当、思召帰住御免之上、兵士某父に被仰付、以前之年数被継遣之』と云ふ申渡があつた。これは八月二十七日にあつた明治天皇の即位のために、八人のものが特赦を受けたので、兵士とは並の兵卒である。士分取扱の沙汰は終に無かつた。」(傍点筆者) という末尾近くの一文に至つて存分に水底を見せてくれる。「まだ」と「終に」、鷗外の筆鋒は犀利にして鮮明である。鷗外の日録大正二年十二月十一日の条には、「小論文大塩平八郎を書き畢る。」とあり、五日後の十六日の条には「夜堺事件を書き畢る。」とある。「小論文大塩平八郎」とは「三田文学」に發表された「大塩平八郎(附録)」のことである。とすると、「未だ」も「まだ」も、そして、「終に」もほぼ時を同じくして鷗外の腹中から出て來た言辭ということになる。

平八郎断案の一文には、鷗外の平八郎に対する批判の口吻が藏せられ

ている。平八郎の有限性を指摘しようとする物腰が認められる。そういう鷗外の想念を背負つて用いられている表現が「平八郎風情には不可能でも」であり、「平八郎の思想は未だ醒覺せざる社会主義である。」でもある。まさしく、乃公出でずんばの感を禁じえない言辭である。このような「大塩平八郎(附録)」の口吻を歴史小説の具象の中に捜し求めるとすれば、「四、宇津木と岡田と」がある。天保八年二月十九日の早朝の光景が次のように描かれている。

岡田は跳ね起きた。宇津木の枕元にゐざり寄つて、「先生」と声を掛けた。

宇津木は黙つて目を大きく開いた。眠つてはゐなかつたのである。

「先生。えらい騒ぎでございます。」

「うん。知つてを。己は余り人を信じ過ぎて、君までを危地に置いた。こらへてくれ給へ。去年の秋からの丁打の支度が、仰山だとは己も思つた。それに門人中の老輩数人と、塾生の一半とが、次第に我々と疎遠になつて、何か我々の知らぬ事を知つてをるらしい素振をする。それを怪しいとは己も思つた。併し己はゆうべまで事の真相を看破することが出来なかつた。所が君、ゆうべ塾生一同に申し渡すことがあると云つて呼んだ、あの時の事だね。己は代りに聞いて來て遣ると云つて、君を残して置いて出席した。それから歸つて、格別な事でもないから、あした話すと云つて寝たのだがね、実はあの時例の老輩共と酒宴をしてゐた先生が、独り席を起つて我々の集まつてゐる所へ出て來て、かう云つたのだ。一大事であるが、お前方はどう身を処置するか承知したいと云つたのだ。己は一大事とは何事を問うて見た。先生はざつとこんな事を説かれた。我々は平生良知の学を攻めてゐる。あれは根本の教だ。然るに今の天下の形勢は枝葉を病んでゐる。民の疲弊は窮まつてゐる。草妨礙あらば、理亦宜しく去るべしである。天下のために残賊を除かんではならぬと云ふのだ。そこで其残賊だ

な。

「はあ」と云つて、岡田は目を睜つた。

「先づ町奉行衆位の所らしい。それがなんになる。我々は実に先生を見損つてをつたのだ。先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考へてをられぬらしい」。(傍線筆者)

十六歳の孫弟子岡田良之進を前にして語つた宇津木矩之允の師平八郎評の言辭は鋭い。大塩平八郎門下で「学力の優れた方」にある宇津木は師平八郎が「天下のために残賊を除く」として立つ日の朝、その有限性をもののみごとに看破している。「先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考へてをられぬらしい。」という平八郎評と同義の一文を「大塩平八郎」(附録)の中に求める時、「平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である」という文言が異様なまでに光彩を放つことになる。

稲垣達郎は「宇津木と岡田と」において、歴史小説「大塩平八郎」の全十三節の見出しが主旨事件が生起する場所の名を用いているにかかわらず、「四」と「六」とが「宇津木と岡田と」と「坂本鉉之助」とであることに触れ、作者がこれらの人物に「特別の注意」を向けていたことの証左であるとしたうえで、「坂本と平八郎は、坂本と広瀬の場合とは別のかたちで、秩序に忠なるものと秩序を破るものとの対照をなしているが、必ずしも直接の対立者なり対決者なりとしてはとらえられていない。そこへゆくと、宇津木矩之允はちがう。平八郎への否定者として立ちふさがる。そして、宇津木は、平八郎への否定者であることにおいて、鷗外には肯定的人物なのだ」。(12)。(傍点原文のまま)と記している。そして、稲垣は、引用文中の傍線部、すなわち、宇津木の「最後の詞の最後の一句」(13)について、「このくだりの宇津木の真意が、どうにもとらえにくい。『先づ町奉行衆位の所を、つまり、せいぜいその程度のものを『残賊』としてとり除いても、しよせん無駄であること、そういう

意味だけは受取れそうだ。が、その先の『先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考へてをられぬらしい』が、これだけでは、宇津木が『將軍家』と『朝廷』をどんなものと考えているのかがあきらかでない。『先づ町奉行衆位の所』の『先づ』と『位の所』には、どうも、『残賊』としての町奉行衆の実体に対して、たかをくくっているニュアンスがある。そのニュアンスからすると、『將軍家』と『朝廷』こそが町奉行衆などとは比較にならぬ重味のある、それこそが『残賊』の中核であるというような見解が、『先づ町奉行衆位の所』というこのなかに内在しているかのような感じをもたせる。たかが『町奉行衆位の所』を『残賊』として取り除いたところで、けっきょく窮民は救済されない。窮状の根元は、あくまで『將軍家』『朝廷』にある。それを取り除かないかぎり、町奉行衆位の所を取り除いたところで、まったく無駄骨にすぎない。だから、『それがなんになる』なのだ。宇津木のことばからは、こんな風な論理が引き出せなくもない。」としている。宇津木矩之允は、稲垣の指摘するごとく、鷗外にとっては「肯定的人物」である。平八郎の有限性を一刀両断のもとに裁断し、『將軍家』や『朝廷』という権力機構の極所を論う平八郎の門弟子宇津木矩之允の造型には作者鷗外の思い入れがある。宇津木も、そして宇津木を描く鷗外森林太郎も剣呑である。乃公出でずんばの感を禁じえない。

鷗外が明治四十五年一月一日発行の「中央公論」第二十七年第一号に発表した思想小説「かのやうに」に次のような場面がある。

秀麿は父の詞を一つ思ひ出したのが機縁になつて、今一つの父の詞を思ひ出した。それは又或る日食事をしてゐる時の事で、「どうも人間が猿から出来たなんぞと思つてゐられては困るからな」と云つた。秀麿はぎくりとした。秀麿だつて、ヘツケルのアントロポゲニイに連署して、それを自分の告白にしても好いとは思つてゐない。併しお父う様の此詞の奥には、こつちの思想と相容れない何物かが潜んでゐるら

しい。まさかお父う様だつて、草昧の世に一国民の造つた神話を、その儘歴史だと信じてはゐられまいが、うかと神話が歴史でないと云ふことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るやうに物質的思想が這入つて来て、船を沈没させずには置かないと思つてゐられるのではあるまいか。さう思つて知らず識らず、頑冥な人物や、仮面を被つた思想家と同じ穴に陥いつてゐられるのではあるまいかと、秀麿は思つた。かう思ふので、秀麿は父の誤解を打ち破らうとして進むことを躊躇してゐる。秀麿が為めには、神話が歴史でないと云ふことを言明することは、良心の命ずる所である。それを言明しても、果物が堅実な核を蔵してゐるやうに、神話の包んでゐる人生の重要な物は、保護して行かれると思つてゐる。彼を承認して置いて、此を維持して行くのが、学者の務だと思ふばかりではなく、人間の務だと思つてゐる。(14) (傍線筆者)

「かのやうに」の前掲部分は、三年間のベルリンでの生活を終えた五条子爵の嗣子秀麿が日本に帰つてから「一年近く立つ」た晩秋初冬の感慨である。ドイツでキルヘルム二世とハルナックとの「君臣の間柄」の中に「模範」を見た秀麿は、書物を沢山携えて帰国はしたものの、畢生の事業とする国史の研究にその一步を踏み出すことができない。秀麿が日本の歴史を書くに當つては、「神話と歴史との限界」を明確なものにしなければならぬ。それさえ終れば秀麿は安心して「歴史に取り掛かれる」はずである。しかし、それを敢行することは、秀麿の「周囲の事情」から許されそうにない。最初の一步を踏み出しえない秀麿に残されるものは「思量の体操」としての読書の世界のみである。時雨めいて来た山の手の日曜日、「又本を読むかな」を繰り返す秀麿造型の背後に

は南北朝正閏問題に対する鷗外の感慨がある。

刊法第七十三条に関する被告事件、すなわち、大逆事件の被告二十六名に對して「第一審ニシテ終審<sup>(15)</sup>」たる大審院特別裁判所の宣告が下つたのが明治四十四年一月十八日のこと、翌十九日の読売新聞第一面の「論議」欄には、二段にわたつて「南北朝対立問題(国定教科書の失態)」が掲載された。

当該記事は、明治維新の端緒を「南朝を宗としたる尊王論の深く天下の人心を刺戟したる」に在りとしたうで、「然るに茲に吾輩の怪訝に堪へざる一大事件は、来四月より新に尋常小学生に課すべき日本歴史の教科書に、文部省が断然先例を破つて南北朝の皇位を對等視し、其結果楠公父子、新田義貞、北畠親房、名和長年、菊地武時等諸忠臣を以て、逆賊尊氏、直義輩と全然伍を同うせしめたるに在り。天に二日なきが若く、皇位は唯一神聖にして不可分也。設し両朝の對立をしも許さば、国家の既に分裂したること、灼然火を睹るよりも明かに、天下の失態之より大なるは莫かる可し。何ぞ文部側主張の如く、『一時の変態』として之を看過するを得んや。然らば則ち其一の正にして他の悶たること固より弁を俟たじ。」と断じ、文部省側の責任を追及している。半嶺子こと峯間信吉の投じた一石は帝國議會でも取り上げられ、異様な軌跡を辿つたうで、四十四年十月及び十一月の尋常小学校日本歴史の国定教科書の改訂となつて結実するが、小説「かのやうに」は、四十四年一月の南北朝問題を随所に象嵌しつつ、作者鷗外自身の「一長者ニ対スル心理状態」を描いた作物である。

大正七年歳晩の十七日、鷗外は山田珠樹あてに一通の書簡を認めてゐる。大正三年四月五日に親山書店より刊行された単行本「かのやうに」を山田珠樹に郵送したうでの作者自身の「解説」の書簡である。「カノヤウニ芝へ郵送仕候二付御入手ト奉存候今朝未ダ出勤セズ少閑有之候故一巻ノ内容書キシルシ御笑覧ニ供シ候カノヤウニハ中ニモデアエルヲ使



ヒアルハ画工一人ニテコレハ旧友岩村透ニ候只頭髮ハ白樺連ノ一人ニ此ノ如キ髪ノ人アルヲト思ヒ出シ書キ候主人公ハ全く實在セザルモノニ候シカルニ奇ナルハ同名ノ人青年ニテ當時家庭内ノ葛藤ノタメ座敷牢ニ入り其人ニ父トノ衝突モアリシ由ニテ小生ニ書ヲ寄セ来候イデエハワイヒンゲナル御話申候通ニ候然ラバ全篇捏合セモノナルカト云フニ一層深ク云ヘバ小生ノ一長者ニ対スル心理状態ガ根調トナリ居リソコニ多少ノ生命ハ有之候者ト信ジテ書キタル次第<sup>(16)</sup>」というのが小説「かのやうに」に係る解説である。山田珠樹あて書簡はかなりの長文で、続いて鷗外は「吃逆」以下の単行本「かのやうに」収載三作品の解説を行っているが、小説「かのやうに」について鷗外が記すところを要約すれば以下のとおりになる。

すなわち、「かのやうに」一篇でモデルが存在するのは画工として登場する綾小路ひとりで白馬会の岩村透をモデルにしていること、主人公五条秀麿は全くの架空の人物であるが発表当時誤解から若干のモデル問題を起したことが、「かのやうに」の「イデエ」は「ワイヒンゲル」に拠ること、及び「かのやうに」は鷗外自身の「一長者ニ対スル心理状態」が根調となった作品であること、の四点である。文中の「イデエ」は「着想」の意であろう。

「皇室の藩屏」として生きるという規矩を背負った秀麿が今卓の上で開いているのが Hans Vaihinger (一八五二—一九三三) の手になる「Die Philosophie des Als-Ob」(明治四十四年刊)である。鷗外自身も多事であった四十四年の歳晩、舶載の「Die Philosophie des Als-Ob」をその卓の上に開いていたのであろう。因みにその日録十二月十四日の条には「かのやうに脱稿す。」とあり、二十一日の条には「かのやうにを校閲す。」とある。

鷗外はやがて茉莉の夫となる山田珠樹を相手に単行本「かのやうに」の解説を行っている。賀古鶴所あての書簡の時と同様に冗舌である。「か

のやうに」一篇を支配する「根調」が「一長者ニ対スル心理状態」であることを明言している。「根調」とは基調の意であらう。この「一長者」をめぐる小堀桂一郎は「乃木が念頭にあるのではないか」という見解を示している<sup>(17)</sup>が、「長者」の語義に密着する時、乃木希典よりも山県有朋の可能性が強いのではなからうか。「長者」とは「共同体の主宰者」の意であり、「一長者」に代入しうる人物は山県有朋その人であらう。

山田珠樹あて書簡の中で鷗外は「かのやうに」に続いて「吃逆」「藤棚」について触れたうえで、いわゆる秀麿ものの掉尾を飾る「鍵一下」について「鍵一下第一ノエピソードハ梨本宮様ヲ送り奉リシ時ノアリノマ、ニ候其ニハ Cynique<sup>アシキモ</sup>ナル石黒男爵ガ出シアリ候本文ハ全ク写生ニテ疎ニ流レ自ラ無価値ト思ヒ居候只奇ナルニハ文学ヲナシ居リシ文科大学ノ一青年ガ殆同時ニ本間俊平<sup>平</sup>ノ世話ニナリシ故ソレヲ書キシニハアラズヤトワザ／＼上田万年君ヨリ問合セニ接シ候M君ハ前田正名ニ候コレモ伴ヲ本間ニ托シ居リ候無価値ト思ヒ居リシニ拘ラズ反響ハアリシ者ニ候」と説明している。

「鍵一下」第一のエピソードが梨本宮を馱頭に送った時の光景であり、城鼠社狐の中に生きる登場人物が男爵石黒忠憲であることを白状した鷗外も、「かのやうに」の「小生」の「心理状態」がだれに対するものかについては語っていない。むしろ、明記せずとも「一長者」なる表現によつて存分に理解しようと考えたのではなからうか。共同体の主宰者たる「一長者」は陸軍大将乃木希典ではなく、山県有朋であらう。乃木であれば何ら憚る必要はない。生前の乃木希典に対して鷗外が意味ありげな「一長者」なる符牒を使う必要はなかったはずである。

「かのやうに」の中に次のような場面がある。「思量の体操」に苦しむ秀麿と画工綾小路との対話の場面である。

秀麿は綾小路の正面に立ち止まつて相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぼつと赤くなつて、その目の奥にはフアナチスムの火に似た、

一種の光がある。「なぜ。なぜ駄目だ。」

「なぜつて知れてゐるぢやないか。人に君のやうな考になれと云つたつて、誰がなるものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ当て、先祖の幽霊が盆にのこゝ歩いて来ると思つてゐる。道学先生は義務の発電所のやうなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教はつた師匠がその電氣を取り続いで、自分に掛けてくれて、そのお蔭で自分が生涯びり／＼と動いてゐるやうに思つてゐる。みんな手応のあるものを向うに見てゐるから、崇拜も出来れば、遵奉も出来るのだ。人に僕のかいた裸体画を一枚遣つて、女房を持たずにゐろ、けしからん所へ往かずにゐろ、これを生きた女であるかのやうに思へと云つたつて、聴くものか。君のかのやうにはそれだ。」

「そんなら君はどうしてゐる。幽霊がのこゝ歩いて来ると思ふのか。電氣を掛けられてゐると思ふのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思ふ。」

「どうも思はずにゐる。」

「思はずにゐられるか。」

「さうさね。丸で思はない事もない。併しなる丈思はないやうにしてゐる。極めずに置く。画をかくには極めなくても好いからね。」

「そんなら君が仮に僕の地位に立つて、歴史を書かなくてはならないとなつたら、どうする。」

「僕は歴史を書かなくてはならないやうな地位には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、平氣な、殆ど不愛想な表情になつてゐる。

秀麿は氣拔けがしたやうに、両手を力なく垂れて、今度は自分が寂しく微笑んだ。

「さうだね。てんでに自分の職業を遣つて、そんな問題はそつとして

置くのだらう。僕は職業の選びやうが悪かつた。ほんやりして遣つたり、嘘を衝いてやれば造倣はないが、正直に、真面目に遣らうとする、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ。」

綾小路の目は一刹那鋼鉄の様に光つた。

「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」

秀麿は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のやうな口吻で、声低く云つた。「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云つた。

綾小路は背をあぶるやうに、暖爐に太つた体を近づけて、両手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになつて立ち、秀麿はその二、三步手前に、瘦せた、しなやかな体を、まだこれから延びようとする今年竹のやうに、真つ直にして立ち、二人は目と目を見合はせて、良久しく黙つてゐる。山の手の日曜日の寂しさが、二人の周囲を支配してゐる。

戯曲のト書きを見るがごとき結末であるが、その目を一刹那「鋼鉄の様に」光らせて「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」と迫る綾小路は五条子爵家の嗣子秀麿にとって「デモン」である。明治四十三年九月一日発行の「三田文学」第一巻第五号に発表した「フアスチエス」において、N判事と文士の会話の後で、「笠の如き麦藁帽を被り、長さ踝に達する鼠色の大引き廻しを纏ひたる大男。短き鬚鬚を繞りて、眼光炯々たり。いづくより来りしか、忽然二人の前に現れ、黙つて二人を睨む。二人左右に尻餅を擣く。」というト書きを従えて登場した「引き廻しの人」は、

見苦しい奴等だ。己を誰だか知つてゐるかい。Heinrich Heine には影が形に副ふやうに、一人のDaemon が附いてゐた。其デモンが云ふには、昔ロオマの consul の従者に licor といふものがあつて、笞の束の真中に鍼を立てた fascas といふ道具を持つてゐたが、自分も其従者の様に、お前の口で言ふことを、あとから実行して行くのだと云

つたさうだ。己もデモンだ。やい。へろへろ文士。己は貴様を見損つてこれ迄附いてゐたのだが、もうこれでお別れだぞ。見下げ果てた奴め。さつきからの物の言ひざまはなんだ。物識り振つて高慢な事を言ふかと思へば、自分で自分を打ち消して、遁げ腰になつてゐる。先覚者や革命家はあるまいと云はれて、へえ、ごさいませんと引き下がる。己が附いてゐて遣るのに、なぜ己が先覚者だと名告らないのだ。貴様の文芸生活と俗生活とは到底矛盾を免れないと、三宅雪嶺が云つたのは、けふ己が別れるのを預言したやうなものだ。やい。役人。国家は貴様にオオソリチイを与へてゐる。威力を与へてゐる。それはなんの爲めに与へてゐるのだと思ふんだ。己は執法者だから、己の頭脳で己が判決する。歴史にも構はない。世界の文化にも構はない。己の判決と違つた判決をすれば、それはそのした奴の間違ひだといふやうなことを言つてゐる。丸でロオマ法皇の *infallibilis* のやうな話だ。

*Godiamoci il Papato, che Dio ce l'ha dato* と、日本の芸術界がそれで恐れ入つてゐると思ふかい。威力は正義の行はれるために与へてあるのだぞ。ちと學問や藝術を尊敬しろ<sup>(18)</sup>。

と宣告して「へろへろ文士」と役人（N判事）を一刀両断にしている。末尾に「堀端を大股に歩み去る。二人腰の抜けたるままにて見送る」というト書きの付せられた「フラスチエス」の最後の詞の最後の一句<sup>(19)</sup>は、東京控訴院判事今村恭太郎の「官憲と文芸」への回答であると同時に、鷗外自身に対する自虐の言辭である。「やい。へろへろ文士。」で始まるデモンの批判の鋭鋒は、鷗外が鷗外自身に向けた刃でもある。「己は貴様を見損つてこれ迄附いてゐたのだが、もうこれでお別れだぞ。見下げ果てた奴め。さつきからの物の言ひざまはなんだ。物識り振つて高慢な事を言ふかと思へば、自分で自分を打ち消して、遁げ腰になつてゐる。先覚者や革命家はあるまいと云はれて、へえ、ごさいませんと引き下がる。己が附いてゐて遣るのに、なぜ己が先覚者だと名告らないの

だ。貴様の文芸生活と俗生活とは到底矛盾を免れないと、三宅雪嶺が云つたのは、けふ己が別れるのを予言したやうなものだ。」とは両刃の剣である。今村恭太郎の言挙げに対して拱手傍觀している文壇に対する鷗外一流のアイロニーであると同時に、二か月前の七月一日に発行された「太陽」における三宅雪嶺の鷗外評を踏まえうえでの自虐の弁でもある。雪嶺は「現時の我文芸」において鷗外を取り上げて、その亀裂・分裂の構図を鋭く抉別していた。長谷川泉の「ドッペルゲンガーの調整・拮抗——森鷗外の病跡と精神の軌跡——」<sup>(20)</sup>の犀利な分析と照合する時、鷗外の深部を垣間見る思いがする。

三宅雪嶺は「現時の我文芸」で当今の文壇の状況を概観したうえで、それぞれの文士評を試みている。「鷗外は調和すべからざる二つの異なつた頭脳を有つて居る。一は彼が軍職にある關係より、養ひ來つた上官の命令に服するといふ風の頭脳で、他の一は彼の近時の作に現はれたる如き風俗壊亂的の頭脳である。この二つは到底調和が出来ない。若し強て之を調和しやうとすれば彼れは手も足も出なくなる。彼れが水沫集を書いた時代は、彼の筆によつて兎も角も邦人に独逸文学を紹介しただけの効果はあつた。然るに彼れの今日の作は、彼れの道楽、乃ち酒を飲み煙草を吸ふ代りの暇潰しとすればよいかも知れぬが、若し彼れの抱負にして文壇に何等かの事業をなさうとするにあらば、あんな物は寧ろ書かぬ方が宜いと思ふ。露伴の如く沈黙を守る方が賢であると思ふ。」というのが雪嶺の言挙げである。文中の「あんな物」とは「風俗壊亂的頭脳」から誕生した作品ということになる。雪嶺のいう「近時の作」にそれを求めるとすれば、前年の六月及び七月に「昂」に発表した「魔睡」と「キタ・セクリアス」の名が浮かんでくる。

「太陽」における雪嶺の鷗外論難に対する回答として書かれたのは、直接的には明治四十三年八月一日発行の「三田文学」に掲載された「あそび」であるが、「あそび」の次に位置する「フラスチエス」において

も雪嶺の放った一矢は十分にその効果を維持しえている。最も鋭角的に鷗外の急所をついた言辭でもあった。調和のなしい「二つの異なつた頭脳」とは手痛い指摘である。

遠藤誠治は「二つの手斧——鷗外・樗牛におけるハイネ・序説——」<sup>(21)</sup>において、「フラスチエス」末尾の「引き廻しの人」の登場の場面について瞠目すべき見解を示している。「引き廻しの人」に係るト書きを引用したうえで、遠藤は「ハイネにつきまとうデーモンが△覆面▽をし、△マント▽を身につけているのになら、い、「フラスチエス」のデーモンも△笠▽のような帽子をかぶり、△大引き廻し▽をまとい、と考えることもできる。しかし、最初に△引き廻しの人▽とあるのだ。

前田勇編『江戸語の辞典』をみると、①重罪の付加刑。馬上に縛りつけ市中を引回し刑場へ行く。②引廻し合羽の略とあり、『広辞苑』その他もほぼ同じである。私自身は、①の意味をとつさに思い、カッコ内を読み、一瞬目を疑った。堀端により皇居、つまり天皇を暗示し、△引き廻し▽により罪人幸徳秋水を暗示した鷗外は、( )の中に、△大引き廻し▽と、大の字をつけることにより、意味を変えてしまったのではないだろうか。カモフラージュではあるまいか。文士、官吏の別れるところに、△(文士) 帽を脱いで去らんとす。官吏も帽の縁に手を掛く。暮色堀の向うの土手の松を罩む。▽とあり、皇居の前における官吏・文士の関係が△帽▽への手の動かし方で、皮肉に描かれている。——なぜ、こんな皮肉な場面に△堀▽△堀端▽が出るのか。——△笠の如き麦藁帽▽も罪人を思わせる。そして△堀端▽の三回の登場。△堀端▽を強調して何かを暗示している。(傍点原文のまま)と推論している。

長谷川泉の教示により遠藤論文を一読して目を瞠る思いを禁じえなかった。大逆事件の宮下太吉らの検挙が五月二十五日、それに続く幸徳秋水の逮捕が六月一日である。鷗外が「フラスチエス」を脱稿したのは八月二十一日のことである。遠藤誠治はこのディテールに論及して、「フ

ラスチエス」末尾に登場する「デーモン」に秋水の面影を見出ししている。近代日本のターニングポイントに立って、何とか一つの回答を得たいと苦闘する鷗外森林太郎の背後には、直言を憚らないデーモンがいたのである。その意味において、遠藤の「鷗外の背後には、どうしても言行不一致にならざるをえぬ自分を見させているデーモンが生涯いたにちがない」という推論は光っている。鷗外森林太郎の心中には、生涯ひとりのデーモン Demon が巣くっていた。ドイツ留学時のエリーゼとの出会いとその別離を、石黒忠憲の極めて賢明な「蒼山」処理の山口<sup>(22)</sup>と比較する時、また、帰国後の日本近代医学の方途をめぐっての「東京医事新誌」における勇猛にして大胆なる発言を読む時、そのデーモンは林太郎生来のものであったの感を禁じえない。しばしば争論を好み、その結果として孤立に陥入らざるをえないジャーナリスティックな反応症は医事評論のなまじむるところのみではなかったはずである。

「東京医事新誌」を追われた鷗外は、明治二十二年十二月十三日発行の「医事新論」創刊号を新たな砦としてデモニッシュ(dämonisch)な言挙げを行っている。「敢て天下の医士に告ぐ」と題する極めて戦闘的な医界批判の言辭を播く時、鷗外森林太郎と同居するデーモンの性の深さに目を瞠る思いがする。

余の医林に於けるや現に敗軍の一将たり伶仃孤立、狼の狼を失ひしが如く海月の蝦を離れしが如し何の幸ぞ諸君の眷顧を辱うして、既にその末班に列することを得、又た数行を初号の首に題することを許さる余が喜び其れ何如ぞや。昔は張儀、辱を得たるときその妻に問ふて曰く吾舌の尚ほ在るや不を視よと、その妻笑て曰く舌在り、儀が曰く足れりと余は明治二十一年九月を以て郷に還り今茲一月を以て東京医事新誌の緒論欄を創め前月(十一月)の初に至るまで此業を持続せしが(五六二一六〇六号)賦性、疎放にして議論、硬直なるが為に屢々不測の禍を買い世間多少の我運動を阻格せんとする分子は陰に其謀を行

ひ密に其網を布き積威の加はる所、遂に我可愛の緒論欄を倒すに至れり吁嗟々々緒論の欄は既に倒れたり、群蟻の力は能く堤堰を穿ちたり世人は或は応に反働力の此機に乗じて起り洪水横流して余を万頃波底に埋めんことを慮りしならん然れども是れ未だ余を知ることの深きものに非ざるなり余は嘗て誓ふて曰く「吾今日の名誉は害ふべし吾後年の事業は礙ぐべし吾志は奪ふべからず（新誌五九一号）」と嗚呼此奪ふべからぬ志は決して挫折せず我実験的医学の前途に白蛇の横れる限り、彼刀筆斗筭の材が堂々たる学問の宮殿に住める限り彼摸稜の手段が天下医事の重機を滞らしむる限りは余は我志を貫き我道を行はんと欲す吾舌は尚ほ在り、未だ嘗て爛れざるなり我筆は猶ほ在り、未だ嘗て禿せざるなり、況んや諸名士の鼓吹振作を得て今将に心丹を吐き犬馬の勞を効さんとす。來れ、天下医林の学士、才人、來て余等と俱に実験的医学の真相を發揮し立論挙績、彼西人に示すに東方、必ずしも人なきにあらざるを以てせよ<sup>(23)</sup>。

随分と剣呑極まる言挙げではある。「東京医事新誌」から放逐された結果とはいえ、乙酉会のリアクションを招来しかねない言辭である。このエクセントリックな一文に込められたエネルギーは終生鷗外森林太郎の心底に存続したはずである。「刀筆斗筭」の輩を痛罵するこの立論はまさしくデーモンの一音であり、「フラスチエス」末尾のデーモンとの間にさほどの逕庭は認められない。片やドイツからの帰国後一年有余の明治二十二年歳晩の所論、一方は明治四十三年初秋の作物である。

鷗外の歴史小説を論ずるに當って常に論及される作物に「歴史其儘と歴史離れ」がある。大正四年一月一日発行の「心の花」第十九巻第一号に發表したものであり、「山椒大夫」創作の楽屋裏を語ったものであるが、「兎に角わたくしは歴史離れがしたさに山椒大夫を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れが足りないやうである。これはわたくしの正直な告白である。」という一文でピリオドを打つ「歴

史其儘と歴史離れ」の中に、「友人中には、他人は『情』を以て物を取り扱ふのに、わたくしは『智』を以て取り扱ふと云つた人もある。しかしこれはわたくしの作品全体に渡つた事で、歴史上人物を取り扱つた作品に限つてはゐない。わたくしの作品は概して *dionysisch* でなく *apollinisch* なのだ。わたくしはまだ作品を *dionysisch* にしようとして努力したことはない。わたくしが多少努力したことがあるとすれば、それは只観照的ならしめようとする努力のみである<sup>(24)</sup>。」という一文がある。果してこれを「正直な告白」として鵜呑みにしうるものであろうか。多少なりとも鷗外の一門をうかがつた者が鷗外の作物をアポリニッシュなものとして片付けうるであらうか。舌と筆とをもつて「天下医事の重機」を遲滞せしむる輩に鉄槌を下す「敢て天下の医士に告ぐ」の筆者は数え年二十八歳である。そして、知命の齡を前にしても依然として意氣軒昂である。

他者の誤謬を指摘しうる時、人は幸せである。しかし、そのような誤謬や矛盾が自己の中に存在することに気付く時、人は均衡を失ふことになる。三宅雪嶺の「太陽」における鷗外論難の一文は鷗外森林太郎の心中にかねてより存在する二つのものを明示して余りあるあるものであった。ジャーナリスティックな反応シンドロームの人鷗外は「あそび」において直ちに反応・回答を示すとともに、その心の動搖の余蘊は「フラスチエス」末尾のデーモンの言辭の中に形を現した。遠藤の指摘するところ、秋水の面影をただよわせるデーモンによつて、お堀端で鞭打たれたかつたのは鷗外森林太郎自身であつた。「拮抗」と「調整」の間に苦悩する鷗外の自虐の言辭、それが「フラスチエス」末尾のデーモンの最後の詞の最後の一句である。因みに長谷川泉は、「ドッペルゲンガ」の調整・拮抗において、鷗外の第一の遺言と戦地からの志げあて書簡の間に横たわる「分裂」をとりあげ、「鷗外が日露戦役に際し、第二軍軍医部長として出征する前に認めた遺書での妻志げの位置は、まさし

く鷗外の『冷眼』にさらされたものである。そこには森家の家長として毫も仮借するところのない妻の志げ像が浮かびあがってくる。それに対して、戦地から妻志げに送った愛の手紙は、甘い手離しのものである。そこには年たけてからの後妻との間に生まれた愛児たちへの慈愛に満ちたパッパ(父親)の姿と全く相似の鷗外像がある。志げを素材にした「半日」そして破棄されて陽の目を見なかったその後日談『一夜』も志げには厳しいものであった。鷗外のドッペルゲンガーがそこにも見られる。<sup>(25)</sup>として鷗外の軌跡の中にDoppelgängerの図譜を見出ししている。

鷗外森林太郎の胸中には、ひとりのデーモンが常に存在した。<sup>(26)</sup>調整の図式を押し破って常に前面に出て行こうとするデーモンがいた。「鎚一下」の「己」こと五条秀麿は新橋停車場まで赴いて、再び西下するH君夫妻と会話を交している。秀麿自身がH君夫妻とともに車中の人となることはなかったものの、秀麿のH君夫妻の「日常生活」に寄せる思いが「皇室の藩屏」としての五条子爵家の屋台骨を揺るがす日が来ないとは限らない。「妄想」の主人公は「先きから先き」へと考えた思念の奥津城が「無政府主義」であると知って、「自分はぞつとした。」と記している。率直にしていとも正直な告白である。H君こと本間俊平と再三にわたって書簡の往反をする鷗外は自己のDoppelgängerをいかに処理しようとするのか。そこに「かのやうに」における「彼」と「此」の問題がある。「彼を承認して置いて、此を維持して行くのが、学者の務ばかりではなく、人間の務だと思つてゐる」とは、まことに危険極まる綱渡りではある。「かのやうに」後半部に登場する秀麿の友人綾小路もまた、デーモンの一人である。「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」という綾小路の秀麿叱責の科白は鷗外の中のデーモンのことばでもある。鷗外は「彼」を否定して「此」のみにすがること、そして、「彼」を承認して「此」を潔く捨て去ることも不可能であった。鷗外は「彼」を承認したうえで、なおかつ、「此」をも維持すべく勉強

に余念がなかった。そこに鷗外と社会政策の問題がある。

鷗外は大正八年十二月二十四日賀古鶴所あてに一通の書簡を発している。その中で鷗外は「御話申上候社会政策猶細密ニ申上度近日又々参上仕度存居候名ラツクレバ『国体に順応シタル集産主義』<sup>(27)</sup>Collectivismナリ即チ共產主義トデモ謂フベキカ又『国家社会主義』<sup>(28)</sup>National Socialismナリ即チ共産主義ト云フモノニ近ケレド世間ニ唱ヘ居ルハ同盟罷工ヤ群衆ノ示威運動ニテ成功セントスルモノユエ全ク別ニ有之候猶研究中ニ御坐候<sup>(29)</sup>」と認めている。その文面から推察するに、鷗外は、後に「少年ノ時ヨリ老死に至ルマデ一切秘密ナク交際シタル友<sup>(30)</sup>」である賀古鶴所に話した「社会政策」について、なお詳細に説明するつもりであるが、もし命名するとすれば「国体二順応シタル集産主義」とでも呼ぶべきものであったうえで、「Collectivismナリ即チ共產主義Communismusノ反对ナリ」という注記を付している。

明治四十五年一月一日「中央公論」に発表した「かのやうに」における秀麿の「彼」と「此」との「板ばさみ<sup>(31)</sup>」の中での思量の体操については既に触れたとおりである。「彼を承認して置いて、なおかつ「此を維持して行く」という秀麿の目論見の「此」を鷗外森林太郎その人に密着させるとすれば、「国体二順応シタル」の文言が浮んで来る。

「集産主義」Collectivismについては、「国家社会主義」に係る注記、すなわち、「国家ガ生産ノ調節ヲスルユエニ」<sup>(32)</sup>が端的にその特質を表している。鷗外は「国体二順応シタル集産主義」を再度言いかえて「国家社会主義」というものに近いが、世間で唱えられている「国家社会主義」は、「同盟罷工」ないしは「群衆ノ示威運動」によって成し遂げられるものであり、その点で「全ク別」のものであるとしている。鷗外の考える「社会政策」が知の世界における構築物であることを示唆しており注目されるとともに、このような賀古に対する自己の見解の披瀝は、翌大正九年になっても継続されており、一連の賀古あての「社会政策」の開

陳の奥津城が大正十年十一月一日から「明星」に連載された「古い手帳から」であったことも十分留意されるべきであろう。

鷗外が賀古鶴所あて書簡で、「国体二順応シタル集産主義」「国家社会主義」なる語を使用したのが大正八年の歳晩のこと、この年の四月一日、編輯人高島素之、発行人北原龍雄名のもとに売文社から創刊されたのが雑誌「国家社会主義」である。

創刊号の巻頭言において高島素之は「国家社会主義の色わけ」と題して次のように記している。

無政府主義者はマルクス派社会主義を国家社会主義と称して輕蔑し、マルクス派社会主義者は又、社会改良主義を国家社会主義と呼んで冷笑する。マルクス主義も改良主義も、国家にたよる点に於て、無政府主義者から見れば共に同じ穴の貉である。

然し同じく国家にたよるのでも、マルクス派社会主義は国家に依つて社会主義を実行しやうとし、社会改良主義は国家に依つて資本労働の調和を行はうとする。此点に両者の越え難き溝がある。

其ればかりでは無い。一口に『国家に依つて』と云ふても、改良主義のは其目的に『国家の爲』と云ふ意味が含まれてゐる。然るにマルクス主義のは国家の爲でなくて、社会主義の爲に、国家を使つて社会主義を実行しやうと云ふのだ。

所で我々の国家社会主義は何うかと云ふに、我々は資本労働の調和を斥け、国有主義を実行しやうとする点に於て、マルクス主義と全く立場を同じくするものであるが、一方に社会主義を国家の爲に、国家の手で行はうとする所に、趣旨に於て社会改良主義と共通した点がある。

つまり我々の立場は、經濟上にはマルクス主義を応用し、政治上には社会改良主義の精神で行かうと云ふのだ。社会主義と国家主義との結合と云つても善い。大和魂にマルクスの智慧を注入したものを見て

も善い。

というのが高島の巻頭言である。「大和魂にマルクスの智慧を注入したもの」とはみごとな言い回しである。このような折衷主義は、巻頭言に続く高島の所論である「労働者に国家あらしめよ」国家社会主義の理論的根拠でも、もののみごとに展開されている。高島は、少数特権階級に掌握されている国家の經濟力を国家そのものの管理に移したうで、国民全体の幸福のために運用すべきことを説いたうで、「茲に於て、我々の到達すべき道は一あるのみ。曰く、資本主義の撤廃これである。資本労働の対立を不要ならしむる、愛国的經濟組織の樹立これである。換言すれば国体の爲に、国家をして社会主義を実行せしめんとするものである。」と揚言している。

大正八年八月一日刊行の第四号で終刊した「国家社会主義」は、国体との対決をみごとに回避した一種の折衷主義である。その意味において、父の前に一種の弥縫策を考える五条秀麿の「彼」と「此」との同時併存の夢想と共通性がある。

「古い手帳から」は鷗外最晩年の作物である。それは与謝野寛の証言のごとく、元来マルクス以後の思想にまで論及されるはずのものであった。「古い手帳から」の「明星」連載中の大正十一年一月一日午後一時、「一長者」たる山県有朋が死去した。「古い手帳から」の「其四」が雑誌「明星」に発表された日であった。「古い手帳から」は文字どおり「古い手帳」を見ながらの鷗外森林太郎の「死を前にしてなお真理を追求する客観的な自己蓄積」の産物であろう。しかし、その中にはあの「大塩平八郎（附録）」で語ってみせたような乃公出でずんばという気概は見られない。また、「彼」と「此」との調整に苦悩する秀麿の葛藤も見られない。むしろ、明鏡止水のごとき心境と立場で共産主義の不在証明に尽力する鷗外の姿が顕著である。「古い手帳から」の「其七」の「基督」の中の「基督が社会思想史上に重要な地位を占めてゐることは明か

ある。しかしその富に対する反抗は手段であつて目的ではない。又基督が共産主義を説いたといふ証拠は一も存在しない。」の一文は、「古い手帳から」の根拠を支える鷗外のトーンである。そこには、かつて「フラスチエス」で見せたようなデモンニッシュなエネルギーは存在しない。「安伴君」こと安広伴一郎を通して献呈しようとしたかつての情熱は既に姿を消してしまつたかのようなのである。「帝諡考」や「元号考」の作物のなせるところであろうか、それとも「一長者」たる山県有朋の失墜とその死のなせるところであろうか。

吉田精一は「森鷗外は『体制イデオログ』か<sup>(30)</sup>」において、「古い手帳から」という最晩年の鷗外の社会思想史の著述が、社会主義共産主義を念頭に置き、それに対峙しようとしていることはたしかで、故小泉信三の随喜尊重した所以であつた。」としたうえで、「古い手帳から」は、要するに共産主義思想の有力になり得ることを予想し、その淵源や過去の痕跡をさぐつて、共産主義社会が必ずしも永遠のユートピアでなく、長くつづかないことを、歴史的に証跡をあげて示そうとしたのである。」と記している。この吉田精一の見解を超えるものは、「其一」から「其九」に至る「古い手帳から」には存在しない。かつて鷗外が「三田文学」に発表した「大塩平八郎(附録)」で描いてみせた平八郎に対する鋭利にしてアイロニカルな断案の構図と同じ轍を踏むの感さである。鷗外も「かのやうに」の秀磨がそうであつたように、「山の手の日曜日」の中に踏みとどまつて大正十一年七月九日午前七時の死を迎えた。鷗外が大正二年七月一日発行の「中央公論」に発表した「鎧一下」は次の一文でその幕を閉じている。

己が新橋の停車場で送つた人の数は多い。併しけふH君に逢つて、すぐにそれを送つたやうに、己のために意義のある出来事として記憶すべき場合は、これまで少かつたのである。此記事は少し長いので、己はそれを日記に書く代りに、別の紙に書いた。

H君の生活を書かうと思ひ立つた己の望は何時遂げられるか知れない。事によつたら昔ギヨオテがグレエトヘン悲壯劇の筋を話すのを聞いて、それを先に書いた人があるやうに、此記事を見て、先にH君の事を書く人が出て来るかも知れない。若し今日文壇で老耄者を以て遇せられてゐる己よりも、それを先に書く人が旨かつたら、ギヨオテの先例とは反対に、己は安んじて初め書かうと思つた事を終に書かずにしまふかも知れない<sup>(31)</sup>。

M君に「秋吉に往つて御覽でしたか。」と尋ねられた秀磨は「まだ往きません。併しいつか往つてみたいものです。」と応えている。鷗外にとつて「いつか」の日はついに訪れることはなかつた。鷗外森林太郎は、「妄想」での告白のとおり、「一人の主」に邂逅することもなくその六十年余の生の終焉を迎えた。

# 注

- (1) 「鷗外全集」(昭和四十六年)五十年 岩波書店 ③一八二八
- (2) 大正十年十一月六日付東京朝日新聞
- (3) 「死に臨んでの遺言について」(「鷗外」創刊号 昭和四十年十月)
- (4) 東京都文京区立鷗外記念本郷図書館蔵「鷗外全集」③一—二二
- (5) 篠原義彦「鷗外と漱石——乃木希典の死をめぐって——」(日本文学研究 第十七号)
- (6) 「鷗外全集」③一五六四
- (7) 一八〇—一八一頁
- (8) 「雨。田中正平妻子来留寛日。赴明星会于与謝野寛家。」
- (9) 「鷗外全集」⑤一七二
- (10) 「鷗外全集」⑤一八六
- (11) 「鷗外全集」⑤一八
- (12) 「立教大学 日本文学」第三号(昭和三十四年十一月)
- (13) 「最後の一句」(大正四年十月一日「中央公論」第三十年第十一号)
- (14) 「鷗外全集」⑩一六三



- (15) 裁判所構成法 (明治三十三年二月法第六号)
- (16) ③〇―五二九
- (17) 「森鷗外―文業解題 創作篇」 (岩波書店)
- (18) 「鷗外全集」⑦―三二八
- (19) 「太陽」 (明治四十三年八月号) の「文壇局外観」
- (20) 「病跡からみた作家の軌跡」 (「国文学解釈と鑑賞」昭和五十八年四月臨時増刊号)
- (21) 「鷗外43」 (森鷗外記念会 昭和六十三年七月)
- (22) 「蒼山窃ニ来リ送ル其家媼ト共ナリ白薔薇以テ兆トナス 車アウステル リンクノ上ヲ過キテ頗ル別恨ヲ悪ク夜半四方ニ唯灯火ヲ見ル而已 寝ニ入ル 夜ニ時天微ニ明カナリ車中森ト其情人ノ事ヲ語り為ニ愴然 タリ後互ニ語ナクシテ仮眠ニ入ル」 (竹盛天雄「石黒忠恵日記抄」) :
- 「鷗外全集」月報38)
- (23) 「鷗外全集」②9―三三三
- (24) 「鷗外全集」②5―五〇九
- (25) 一四頁
- (26) 「鷗外全集」③〇―五五九
- (27) 大正十一年七月六日付遺言
- (28) 原題「Der Zensor. (Ergeni Nikolaevich Chirikov) 明治四十四年七月一日発行「三田文学」(第二卷第七号)
- (29) 長谷川泉「鷗外文学の側溝」 (明治書院 昭和五十六年十一月)
- (30) 「本の本」 (ボナンザ 昭和五十一年十二月) 六―八頁
- (31) 「鷗外全集」⑩―一一九

(平成元年十月五日受理)  
(平成元年十二月二十七日発行)

